注12
甘草は消化管機能を補助し、乾姜は局所性貧血を温め、附子は温補を兼ねるのだ本方の適応症は虚寒証であると考えられる。虚寒の個所は表、裏、及び表裏共にある場合がある。いずれの場合でも手足の厥冷を共通とし、表にあるときは仮熱症状を、裏に在るときは下痢清穀を発する。

注13
1.感冒・流感・チフス等で発熱し或は頭痛悪寒身体痛四肢拘急悪寒等の表証があるのに手足厥冷し脈沈弱或は遅のもの
2.急性胃腸炎・コレラ・急性慢性腸炎・大腸炎・疫痢・誤下等下利手足冷脈沈弱、或は嘔吐腹痛悪寒四肢拘急等を伴うもの
3.外傷・手術・分娩等で失血し危く手足冷えのもの
4.満腹感あるも腹満せぬもの
5.吃逆胃寒のもの
6.頬部紅潮手足厥冷のもの
7.身背強痛四肢厥冷脣青面黒のもに使った例がある
8.五歳の中寒で口噤四肢強直失音不語暈倒手足厥冷するものに使った例がある
9.火逆熱甚しきに灸をして咽燥吐血するものに使った例がある

注14
激しい嘔吐と下痢がつづき、口からはいったままの食物を下して、便に臭気がなく、からだが極度に衰弱し、手足は氷のように冷え、爪や唇が紫色なり、脈は細くて弱くなり、シャックリがでてとまらない場合

注15
四逆湯は次の如き病状ある者に用いべし。下痢の回数劇しく、出づる量多くして手足冷える者、手足伸びない者、むかむかと嘔き気ありて手足寒え、発熱あって寒けし身躰だるく口中乾いても水を欲しがらない者、熱があって汗多く出て腹中痛み或は腹下りさむけして手足強く冷える者、腹大いに張りて大便出ざれ共下剤掛ければ下痢を起こし容易に止まらなくなる者、幾度も汗を取った為手足が冷えて元気の無くなった者、本方の證があって便通のない者あり、下利劇しき者あり、一日一回位の者もあり、小便は不利する者は少なし。脈は沈の者多し。本方は平常血の少ない者の風邪、下利等に甚だ効あり。

注16
必須目標 ①沈微細脈 ②四肢厥冷 ③清穀下痢(食物そのままの形で排泄され、また便臭も少ない下利) ④嘔吐 ⑤食事不能 ⑥悪寒。
確認目標 ①尿は多量で着色していない ②汗が多く出る(脱汗) ③顔面蒼白 ④発熱 ⑤四肢拘攣 ⑥舌証は芒刺なく苔もない赤い濡れた舌である ⑦頭痛

処方番号：83A　　**処方名**：四逆加人参湯（しぎゃくかにんじんとう）

処方構成：
甘草 2-4.8、乾姜 1.5-3.6、加工ブシ 0.5-2.4、人参 1-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱あるいは体力が消耗し、貧血気味で手足が冷えるものの次の諸症

効能・効果：
感冒、急・慢性胃腸炎、下痢、吐き気、貧血

原典：傷寒論
出典：

解説：
四逆湯に人参を加えたもので、四逆湯証に似て一層疲労と貧血が甚だしく、体液の欠乏の状態のあるものに用いる。虚弱者や体力消耗者で手足が冷える人に使用される。かぜ、肺炎、胃腸型感冒、急・慢性胃腸炎、下利、吐き気に効果がある。

その使用目標として吉益東洞は「四逆湯の証にして心下痞鞕するものを治す。」とし、『漢方診療のレッスン』では「四逆湯の証で、出血したり、貧血の激しいものに用いる。」とあり、矢数道明『臨床応用漢方処方解説』には「四逆湯証に似て、いっそう疲労と貧血が甚だしく、体液の欠乏の状のあるものに用いる。」とある。大塚敬節『症候による漢方治療の実際』には「後藤艮山は、子宮よりの出血がひどくて、手足が厥冷し、冷汗が流れるものには、四逆湯または四逆加人参湯がよいといい。和田東郭は、産後のひどい子宮出血にあえばこの方を用いるのが良い。その効は他方の及ぶところではないと述べている。」とその出血に対する効果を示している。

83A.四逆加人参湯

参考文献名		炙甘草	甘草	乾姜	附子	生附子	白川附子	人参	御種人参	用法・用量
漢方診療医典	注1		2	2	0.5～1			2		
漢方処方応用の実際	注2		2	2	0.5			2		
臨床応用漢方処方解説	注3		2	2	0.5			2		
傷寒論入門	注4		2	1.5	0.5			1～3		*1
傷寒論梗概	注5		4.8	3.6	2.4 (初回0.5)			2.4		*2
症候による漢方治療の実際	注6		3	2	0.5			2		
漢方と民間薬百科	注7		3	2	1			2		
経験・漢方処方分量集			3	2	1			2		
改定新版漢方処方分量集	注8		2	1.5		0.5	又は (1)	1		*3
増補改訂漢方入門講座上下	注9		2	1.5	1	0.3	又は (1)		1	*4
増補改訂漢方入門講座上下			3	2.5			1.5		1.5	*5
新撰類聚方	注10	二両炙		一両半	一枚生去皮 破八片 (0.3)			一両		*6
漢方古方要方解説	注11		4.8	3.6	2			2		*7
古方薬嚢	注12		2	1.5		0.2	0.6	1		*8

*1 以上四味、水300竓をもって煮て120竓となして60竓宛二回温服せよ。
*2 右四味を調合し、水一合五勺を以て、煮て六勺程となし、滓を去って一回に温服する(通常一日二回)。
*3 水120を以て煮て50に煮つめ二回に分服
便法:甘草3.0 乾姜2.0 白川附子1.0 人参1.5 水半両常煎法
*4 二回に分服
*5 一日三回服用
*6 右四味、以水三升、煮取一升二合、去滓、分温再服
*7 右四味を一包と為し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、滓を去りて一回に温服す(通常一日二、三回)
*8 右四味を水六勺を以て煮て二・四勺となし、滓を去り二回に分け温服すべし。

注1
四逆湯に人参を加えた方で、出血多量などで体液が欠乏して、病勢のはなはだしいものに用いる。

注2
四逆湯の証で、出血したり、貧血の激しいもの。四逆湯の応用に準ずるほか、諸種の出血およびそのために衰弱状態に用いる。

注3
四逆湯証に似て、一層疲労と貧血が甚だしく、体液の欠乏の状のあるものに用いる。

注4
悪寒し、脈は微に,而も復た利するとき、利の止むは亡血なり。四逆加人参湯之を主る。本条は霍乱にて嘔吐下利のために,体液の欽乏を来たしたときの証治を論ずる。悪寒して脈の微なるは少陰の証である。嘔吐下利が止むときは、悪寒もなく、脈も亦緩なるべきであるに、今悪寒を訴え、脈も依然として微なるは、病が完全に治癒していないからである、だから再び下利するのであるが、その下利が甚だしくならないで自然に止まったのは、既に最初の下利で体液が涸渇して、下利を起こすべきだけの水分が体内にない、即ち亡血の状態に陥ったからである。だから急いで体液の快復と、下利に対する治療をせねばならない。本条の証は表裏倶に寒なるものであるから四逆湯の如き強力なる賦活剤に体液快復を来たす人参を加えて投与する。

注5
これは吐瀉し、悪寒し、裏は大に虚し、脈は微にして、津液亡脱の結果、遂に泄瀉の勢いをも失はんとする等、即ち前方の一層重劇なる證に對する薬方であって、主として裏を温め、寒を除き、内を滋潤し、血行を整える等の能を有する。

注6

吐血、子宮出血、腸出血等が突然に起こって、しかもその量が多くて、脈が緩弱または微弱であればこの方を用いる。ところが出血が多いのに、脈が滑数(かっさく)げあったり洪大であったりすれば予後はわるいと思わなければならない。後藤良山は、子宮よりの出血がひどくて、手足が厥冷し、冷汗が流れるものには、四逆湯または四逆加人参湯がよいといい。和田東郭は、産後のひどい子宮出血にあえばこの方をもちいるがよい。その功は他方の及ぶところではないとのべている。

注7

急激に、多量の出血のある場合。胃潰瘍、出産時の大出血

注8

目標・応用:亡血、悪寒、脉微、下利

注9

四逆湯に人参を加えたものだが、この人参は必ず御種人参を使うこと。胃腸症状だけの小柴胡湯や生姜瀉心湯などは竹節人参の方がよいが、脾に属する血の変化の場合は、御種人参でなければいけない。成分が違うからであろう。人参湯、炙甘草湯などは是非御種人参を使うこと。それから四逆加人参湯で人参は処方の一番後になっている。君臣佐使の順いうと甘草は君薬、附子と乾姜は臣薬、この処方では佐薬はなく、使薬の位置になっている。使というものは全権大使もそうだがなかなか責任のある重い役目といえる。白虎加人参湯の人参、桂枝加附子湯や八味丸の附子、小青竜加石膏湯の石膏など皆その処方の大切な役割を占めている。この適応証は亡血である。亡血は貧血のひどいもの、あるいは出血多量で、全身の元気が衰え、手足が冷え、時には悪寒することさえある。それが四逆加人参湯の適応証である。

注10

1.貧血・失血で全身の元気沈滞手足冷、或は悪寒下利等を伴うもの
2.身体が冷え額上手背に冷汗がでるものに使った例がある
3.四逆湯証で下利手足厥冷し心下痞硬するもの
4.胃腸無力症で心下悸四肢関節痛軟便のものを治した例がある
5.夏季脳炎で頭痛嘔吐発熱チアノーゼを起こしたものを治した例がある

注11

悪寒し、脈微にして復た利する証。(霍乱病篇)

此の方は、甘草以下四味より成り、而して甘草はあ其の量最も多く、乾薑之に次、附子、人参は最も少量なり。即ち 此の方は、恰も四逆湯に加ふるに、更に人参を以てせるものなり。故に方極附言に云く「四逆湯証ニシテ心下痞鞕スル者ヲ治ス」と。此の証、能く本方の効用を約言せりと謂ふべし。

応用 1.四逆湯を応用すべき諸病にして、脱汗止み、舌色煤煙の如くにして湿潤し、薬汁、食餌共咽を下だり難く、心下痞鞕し、腹皮虚張する証 2.吐瀉の後、著しく水分を失へる証 3.脱血過多にして、眩暈を発し、或は暈倒する等の証

注12

下利が時々止んだり始まったりして居る中に、自然に止んで甚ださむけする者。下利してのどの乾く者。脉の微なる所に注目すべし。又瘡跡、火傷あとなどにて、ぢくじくとして何時までも愈らず、始めの熱気は既に消え失せ反って冷えを生じたる場合に好きことあり。

処方番号：83B　　**処方名**：甘草乾姜湯（かんぞうかんきょうとう）

処方構成：
甘草 4-8、乾姜 2-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で手足が冷え、薄い唾液が口に溜まるものの次の諸症

効能・効果：
頻尿、尿もれ、唾液分泌過多、鼻炎、しゃっくり、めまい

原典：傷寒論
出典：

解説：
陽気の虚した者（皮膚が弱く、元気の衰えた者）を誤って発汗したために、水分が動揺し、手足は厥冷し、咽中乾き、煩躁・吐逆を発するものに用いる。

本方は主として煩躁・吐逆甚だしく、手足の冷えるもの、老人や虚弱者の尿意頻数・遺尿症・夜尿症・萎縮腎・尿道炎・小児のよだれ・唾液分泌過多症・弛緩性出血（吐血・喀血・子宮出血）・産後の後陣痛・めまい・吃逆（しゃっくり）等に用いられ、また瘰疬（熱性症候なく、ただ疼痛劇甚なるもの）・凍傷・喘息・癲癇・ひきつけ・附子中毒による煩燥・吐逆・漏風（手足の爪の間から風が出る病気）・冷え性などにも応用される。

虚弱な者に発汗させるという誤治により、急激な手足厥冷・煩躁・吐逆・口内乾燥などを起した場合、あるいは平素から冷え症で、尿意頻数・多唾・めまいなどの慢性症状にも用いられる。

83B.甘草乾姜湯

参考文献名		炙甘草	甘草	乾姜	用法・用量
漢方診療医典	注1		4	2	
漢方処方応用の実際	注2		4	2	*1
臨床応用漢方処方解説	注3		4	2	*2
傷寒論入門	注4		4	2	*3
金匱要略入門	注5		4	2	*4
漢方医学			4	2	
新版漢方医学			4	2	
経験漢方処方分量集			4	2	
改定新版漢方処方集	注6		4	2	*5
増補改訂漢方入門講座上下	注7		4	2	*6
古方薬嚢	注8		4	2	*7
1000万人の漢方診断と治療の実際			4	2	
臨床応用漢方処方解説			6	3	*8
増補改訂漢方入門講座上下			6	3	*9
傷寒論梗概	注9		8	4	*10
漢方古方要方解説	注10		8	4	*11
新撰類聚方	注11	四両		炮一両	*12
漢方入門講座	注12		-	-	

*1　水200mlで100mlに煮つめ、2回に分服する。
*2　水200ccをもって100ccに煮つめ、2回に服する。
*3　以上二味、水300銖を以て煮て、150銖を取り濾過して、75銖を温服すること二回せよ。
*4　以上二味、水300銖を以て煮て、150銖となし、75銖二回温ふくせよ。
*5　水120を以て煮て60に煮つめ二回に分服。 便法　水半量で一日三回に分服
*6　水120.0を以て煮へ60.0とし、二回に分服する。一日三回分服にしてもよし。
*7　右二味を水六勺を以て煮て三勺となし滓を去り二回に分けて温服すべし。
*8　水300ccをもって150ccに煮つめ、一日三回に分服
*9　一日三回分服
*10　右二味を調合し、水約一合五勺を以て、煮て六勺程となし、滓を去って一回に温服する(通常一日二回)
*11　右二味を一包と為し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、滓を去りて一回に温服す(通常一日二、三回)
*12　右二味以水三升、煮取一升五合、去滓、分温再服

注1

本方は手足の厥冷、多尿、多唾を目標にして用いる。尿も唾液も希薄である。医師の逆治または急激なショックなどで手足の厥冷を来たした場合には、煩躁の状を呈することがある。本方は甘草と乾姜の2味からなり、甘草は急迫を治し、乾姜は一種の刺激興奮剤で、血行をさかんにする効がある。そのため本方は組織の緊張をたかめ、新陳代謝をさかんにする効がある。本方はいしの誤治によって急激に手足厥冷、煩躁、吐逆、口内乾燥などを起こした場合に頓服として用い、また平素から冷え症で、尿意頻数、多唾、めまいなどのあるものにも用いる。また弛緩性出血,、後陣痛にも用いることがある。

注2

1)傷寒論にある指示は、先ず誤治の場合で、尿利が頻数し、胸ぐるしく、少しさむけがし、下肢がひきつれるようなときは脈が浮いて自然に汗が出るものでも、桂枝湯を用いると反って悪くなって、手足が冷えて咽が乾き、苦しみもだえて、嘔吐するようになる。こういうときには甘草乾姜湯をのむと、足が温まるというものである。

2)よだれを出し、咳が少し出て、口渇なく、尿失禁、尿利煩数のもの。甘草乾姜湯のよだれは陰証で、うすく水のようなよだれである。これが濃く粘稠なとだれで、咳がひどいときは、人参養榮湯などと崇蘭舘試験口訣にある。

注3
虚証のもので、発汗剤を誤用し、そのため陽気さらに虚して、手足厥冷・煩躁・吐逆・口内乾燥等の諸症を発したものを目標とする。また次のような諸徴候を参考として諸病に用いる。脈は沈弱、腹も軟らかく、尿意頻数、希薄な唾液分泌過多などを目標とする。本方は四逆湯から附子を去ったものであり、また人参湯から人参と白朮を去ったものである。甘草は急迫を緩め、乾姜は一種の刺激性興奮薬で、組織の緊張を亢め、血行を盛んにし、元気活力をつけるものである。少陰病に属する薬方であるが、応用範囲を見てわかるように、臓器の方からいえば、脾と肺と腎の三臓の虚を補うものである。

注4
本処方の乾薑は、成本、金匱、羅本等には凡て炮薑と記しているが,玉函、千金翼、宋板等には炮の字はない。乾薑はその儘用いるときは、寒邪を去り、肺を利し、欬逆、身の麻痺する効あり。炮ずるときは苦く、中を守り、脾腎を温め瘧痢、霍乱、腹疼に 佳なり。炒って黒くするときは、血を止め又血を生ず。童便に浸し炒りて黒くするときは、鼻衄、唾血、崩漏を止める,と製法によってその作用を区別しているが、 要するに生、炮、黒炒,童便黒炒の順に於いて、その興奮賦活作用は増強するとことをいうのである。腹症は稲葉克文礼は、胸中煩燥急迫、時に涎痰を吐するものこれなり。小便不利、世俗にいうよばりというものこの証に多し、という。

注5
肺結核で、泡沫の混った涎液を吐するに拘らず、欬しない場合は、患者は渇を覚えないで、必ず尿失禁し、小便の回数は煩数と なる。その理由は上半身の機能が衰微して、下半身の機能を調節することができないからである。この場合は肺中の炎衡は無熱麻痺性で、必ず眩暈を訴え、多量の涎唾液を吐する。甘草乾薑湯をもって興奮覚醒治癒転機を起こさせよ。もしこの湯を服したる後、渇を訴える場合は糖尿病を合併している。

注6
足冷、咽中乾、煩躁吐逆、或は肺痿、涎沫を吐し遺尿、小便数
応用:煩躁、唾液分泌過多症、夜尿症、遺尿、気管支喘息

注7
四逆湯から附子を抜いたようでもあり、人参湯から人参白朮を抜いたようでもある。方意から見れば四逆湯に近い。甘草は炙甘草をつかうから気味は甘温になる。乾姜は気味辛温である。甘草は脾を補う、急迫を緩和する。気道を緩めなどこの処方に於いても皆その働きを呈する。乾姜は胃の陽気を補い温め、辛により肺虚を補うなどの作用が矢張り皆現れる。

注8
手足冷えきり、口中乾き燥いで嘔き気催し落着かざる者、此の場合身體には熱あり、咳出て痰多く口中乾いても水は呑みたがらず小便近く其色白きもの。本方は下剤等の為腹中を冷し手足厥冷を起し悶え苦しむ者に神効あり。則ち誤治したる時の救急薬なり。

注9
これは陽気の己に虚する者が、発汗に因て更に益々虚し、手足厥し、咽中は乾き、煩躁、吐逆等を発する證の薬方であって、主として急迫を緩め、虚を復し、陽気を助くる等の能を有する。

注10
此の方は、甘草、乾薑の二味より成り、而して甘草は其の量多く、乾薑は少量なり。即ち此の方は、以上の二味互に相協同し、以て其の効用を全うするものなり。故に方極附言に云く「厥シテ煩躁シ、涎沫多キ者ヲ治ス」と。この説、能く本方の効用を約言せりと謂ふべし。

注11
1.煩躁吐逆の甚しい者、汗下後に拘らず使う
2.気管支炎アレルギー鼻炎等で肺中冷え泡沫性の痰が出て息切れし冷え症のもの或は小便自利する
3.小児のよだれ・回虫などで生唾が多く胃部に病覚がないもの
4.夜尿症・老人性頻尿・前立腺肥大症・萎縮腎・尿道炎・膀胱炎で冷え性のもの
5.吐血・喀血・鼻血・子宮出血等で胃弱冷え性のもの
6.赤痢・大腸炎に使った例がある
7.盗汗で心下部が苦しいものに使った例がある
8.側臥した方の側に胸痛が起るのに使った例がある
9.吃逆急迫するのに使った例がある
10.百日咳で胸に突き上げて来て或は尿失禁するのに使った例がある
11.産後の下腹痛或は腫塊を生じたものに使った例がある
12.慢驚風(てんかん・ひきつけ・自家中毒・脳膜炎等)子癇に使った例がある
13.手足の爪間から風が出る漏風に使った例がある(老医口訳)

注12
傷寒論の条文通り咽中乾き煩躁吐逆する場合もあれば、それ程でなく生唾が出て吐血するだけのこともある。脉は沈弱、胃部の腹壁は軟い。

処方番号：84　　**処方名**：四君子湯（しくんしとう）

処方構成：
人参 4、白朮 4（蒼朮も可）、茯苓 4、甘草 1-2、生姜 0.5-1、大棗 1-2

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱でやせて顔色が悪くて、食欲がなく、疲れやすいものの次の諸症

効能・効果：
胃腸虚弱、慢性胃炎、胃のもたれ、嘔吐、下痢、夜尿症

原典：太平恵民和剤局方
出典：万病回春

解説：
古方の人参湯の類似方、人参湯より乾姜を去り茯苓を加えた処方である。一般的には生姜、大棗を加えて用いることが多い。胃腸虚弱で貧血の傾向があって元気の衰えたものに用いる基本の処方である。ただし胃腸虚弱の傾向があっても、顔色が赤かったり、また本方を服用して上衝の気味のあるものは服薬を中止するほうがよい。

84.四君子湯

参考文献名		人参	朮	白朮	茯苓	甘草	生姜	乾生姜	大棗
処方分量集		4	4	−	4	1	1	−	1
診療の実際		4	4	−	4	1.5	1.5	−	1.5
診療医典	注1	4	4	−	4	1.5	1.5	−	1.5
症候別治療		4	−	4	4	1.5	1.5	−	1.5
処方解説	注2	4	4	−	4	1.5	−	0.5〜1	1
後世要方解説	注3	4	−	4	4	1	1	−	1
漢方百話		4	−	4	4	1	−	−	−
応用の実際		4	4	−	4	1.5	1.5	−	1.5
明解処方		4	4	−	4	1.5	1.5	−	1.5
漢方処方集		3	−	3	4	2	2	−	2
漢方医学		4	−	4	4	1.5	1.5	−	1.5
精撰百八方	注4	4	4	−	4	2	2	−	−
成人病の漢方療法		4	4	−	4	2	2	−	2

注1　胃腸機能のはなはだしく衰えた虚証のものに用いる。食欲不振，嘔吐，腹鳴下痢し，脈は洪大にして無力，あるいは細小にして頻数，腹力は一体に乏しく，心下に力がない。顔色痿白の兆があって，言語に力がなく，四肢倦怠するものを目標とする。

注2　元気の衰えたもの，胃腸の虚弱と貧血を目標とし，種々の疾患に用いる。脈は軟弱，腹証も弛緩性，アトニー性で軟弱である。胃内停水を認め，食欲不振，全体に元気の衰えたものを目標とする。古人は貧血気味で顔色蒼白，言語に力がなく，手足倦怠で，脈に力がないという五つの症があれば，四君子湯の目標がそろっているとした。

注3　本方は諸病，極度の全身衰弱をきたした場合，とくに胃腸虚弱によって食欲が全く衰え，あるいは嘔吐して食が入らず脈・腹ともに虚弱のものに用いるのである。気虚とは元気虚弱の意であり，また胃気の衰弱無力を意味するものである。

注4　痩せて顔色がわるく，胃腸の消化機能が衰えているもの。腹部の緊張が弱く，振水音がある。食後，手足がだるく，ねむくなる。

処方番号：85　　**処方名**：滋血潤腸湯（じけつじゅんちょうとう）

処方構成：
当帰 4、地黄 4、桃仁 4、芍薬 3、枳実 2-3、韮 2-3、大黄 1-3、紅花 1

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で皮膚にうるおいがないものの次の諸症

効能・効果：
便秘、のぼせ、肩こり

原典：医学統旨
出典：

解説：
主治は出典に「血枯及死血腸にあり、飲食下らず、大便結燥するを治す。」とあり、瘀血が腸にあって飲食下らず大便が秘結するものに用いられ、常習便秘で体力が衰え強い大黄剤の下剤が使えないものに適応し、食道癌、胃癌などに応用されることがある。高齢者の便秘や動脈硬化症に賞用される潤腸湯（『万病回春』）は本方と類似するが韮、紅花、芍薬を欠き、杏仁、厚朴、黄芩、麻子仁を加味したもので、麻子仁丸（『傷寒論』）の類方である。

85.滋血潤腸湯

参考文献名		当帰	地黄	桃仁	芍薬	枳実	韮	大黄	紅花	用法・用量
診療の実際	注1	4	4	4	3	2	2	1.5	1	
処方解説	注2	4	4	4	3	3	3	1～3	1	
後世要方解説	注3	4	4	4	3	2	2	1～2	1	
漢方あれこれ		4	4	4	3	2	2	1.5	1	
診療医典		4	4	4	3	2	2	1.5	1	

注1 血枯を治する方。死血腸にあって，飲食下らず，大便結燥するを治する方剤であるから，食道癌で便秘するものに用いる。胃癌などで病勢進行し，大黄等の下剤の使えない患者で便秘しているもの。

注2 血枯および死血腸に在り，飲食下らず，大便結燥するを治す。

注3 同上

処方番号：86　　**処方名**：紫根牡蛎湯（しこんぼれいとう）

処方構成：
当帰 4-5、芍薬 3、川芎 3、大黄 0.5-2、升麻 1-2、牡蛎 3-4、黄耆 2、紫根 3-4、甘草 1-2、忍冬 1.5-2.5

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱のものの、消耗性疾患などにともなう次の諸症

効能・効果：
乳腺症、痔の痛み、皮膚炎、リンパ腺の腫れ、貧血、疲労

原典：徴瘍新書
出典：勿誤薬室方函口訣

解説：
本方は水戸西山公の蔵方であると伝えられている。
無名の頑瘡、すなわち、はっきり病名のつかないような頑固な悪性の腫瘍、悪性の皮膚病などに用いられる。
皮膚やリンパ腺の頑固な疾患で、諸治効なしというものが目標である。一定の証というものは規定しがたい。しかし頑固で慢性痼疾となり、諸治療に抵抗し、虚証に陥り、貧血・疲労の傾向のあるものが目標である。
臨床では、乳癌・乳腺症・頸部リンパ腫・肺壊疽・腸腫瘍・全身リンパ腺の腫瘤・黒肉腫・梅毒性皮膚疾患・ゴム腫・扁平コンジローム等にて諸治療の効なきものに用い、奇効を奏することがある。

86.紫根牡蠣湯

参考文献名		当帰	芍薬	川芎	大黄	升麻	牡蠣	黄耆	紫根	甘草	忍冬	用法・用量
漢方診療医典	注1	5	3	3	1.5	2	4	2	3	1	1.5	
臨床応用漢方処方解説	注2	5	3	3	1.5	2	4	2	3	1	1.5	
漢方医学		5	3	3	1.5	1	4	2	3	1	1.5	
新版漢方医学		5	3	3	1.5	1	4	2	3	1	1.5	
漢方治療百話第三集		5	3	3	1.5	1	4	2	3	1	1.5	
経験漢方処方分量集		5	3	3	1.5	1	4	2	3	1	1.5	
症候による漢方治療の実際		5	3	3		2	4	2	3	1	2	
漢方後世要方解説	注3	5	3	3	0.5～2	2	4	2	3～4	1	2.5	
1000万人の漢方診断と治療の実際		5	3	3	0.5～2	2	4	2	3～4	1	2.5	
現代漢方入門		5	3	3	1	1	4	2	3	1	1.5	
漢方の診かた治しかた		5	3	3	1	2	3	2	4	2	1.5	
漢方の臨床と処方		4	3	3	1	2	4	2	3	1	1.5	

注1

本方は水戸西山公の蔵方であると伝えられている。無名の頑瘡、判然と病名のつかない頑固な悪性腫瘍、悪性の皮膚病などに用いられる。皮膚やリンパ腺の頑固な疾患で、諸治効なしというのに好い。一定の証というものは規定し難い。頑固な慢性症となり虚証に陥り貧血、疲労の傾向があるものが目標である。方中の紫根は血熱の毒をさまし、頑癬悪瘡を治すといわれている。忍冬、升麻ともに熱を散じ毒を解し、諸悪瘡をなおすもので、牡蠣は堅い腫瘤をやわらげる。黄耆は血を生じ、肌を生じ、排膿強壮の力がある。また当帰、芍薬、川芎は補血強壮の目的で組みいれられてある。

注2

[応用]無名の頑瘡、すなわち、はっきり病名のつかないような頑固な悪性の腫瘍、悪性の皮膚病などに用いられる。乳癌・乳腺炎・頸部リンパ腫・肺腫瘍・全身リンパ腺の腫瘤・黒肉腫・梅毒性皮膚疾患・ゴム腫・扁平コンジローム等にて諸治療の効なきものに用い、奇効を奏することがある。

[目標]皮膚やリンパ腺の頑固な疾患で、諸治効なしというものが目標である。一定の証というものは規定しがたい。しかし頑固で慢性痼疾となり、諸治療に抵抗し虚証に陥り、貧血・疲労の傾向のあるものが目標である。

[方解]方名のように紫根が主薬であるが、これは血熱毒をさまし、頑癬悪瘡を治すといわれている。忍冬も升麻もともに熱を散じ、諸悪瘡を治すものである。牡蠣は堅くて頑固な腫瘤などをやわらげ、かつ皮膚に作用して瘡を治すものである。黄耆は血を生じ、肌を生じ、排膿強壮によって諸瘡を治す主要の薬である。当帰・芍薬・川芎は、いずれも頑固で慢性となって疲労があるのを回復させ、補血強壮の目的で組み入れられている。

注3

楊梅瘡毒、痼疾沈痾、無名頑瘡、及び痒瘡嶮悪の症を治す。

処方番号：87　　**処方名**：梔子豉湯（ししとう）

処方構成：
山梔子 1.4-3.2、香豉 2-9.5

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、胸がふさがり苦しく、熱感があるものの次の諸症

効能・効果：
不眠、口内炎、舌炎、咽喉炎、皮膚炎

原典：傷寒論
出典：

解説：
原典である『傷寒論』には、「汗をかかしたり、吐かしたり、下させるような治療をしたために、元気がなくなり煩（もだえる）（虚煩）し、眠ることが出来ない。激しいとあちこち寝返りをうって（反覆顛倒）、胸がつまった感じがして、なんともいえず苦しく、じっとしていられない（心中懊憹）」と記されている。これはすなわち熱が胸から上に残った「上焦の熱」の状態である。
上焦の熱では、不眠・ノイローゼ・不安感・口内炎・舌炎・食道や気管の詰り・胃や肝の炎症や圧迫感・鼻血などの出血・湿疹・じんましんなどが考えられる。一般に、原料の生薬数が少ないほど、急性の症状に使われることが多く、生薬数の多いものほど体質改善など慢性的な目的で使われる。本方は他の梔子剤（黄連解毒湯・瀉心湯・梔子柏皮湯・加味逍遙散）に比べて、急性症状に使われることが多い。

87.梔子豉湯

参考文献名		山梔子	香豉	用法・用量
漢方診療医典	注1	3	4	
臨床応用漢方処方解説	注2	3	4	*1
漢方薬入門	注3	3	4	
成人の漢方療法	注4	3	4	
1000万人の漢方診断と治療の	注5	3	4	
経験・漢方処方分量集		3	4	
傷寒論入門	注6	3	2	*2
金匱要略入門	注7	3	2	*3
傷寒論梗概	注8	3.2	8	*4
漢方古方要方解説	注9	3.2	8	*5
改定新版漢方処方集	注10	1.5	6.5	*6
改定新版漢方処方集		2	9.5	*7
漢方入門講座 1	注11	2	3	
増補改訂漢方入門講座上下	注12	2	3	
新撰類聚方	注13	十四個(一、四)擘	四合 (五、六)綿裹	*8
古方薬嚢	注14	1.4	6.4	*9

*1 水300ccをもって、まず山梔子を煮て200ccとし、次に香豉を布に包んで加え、再び煮て100ccとし滓を去って二回に分服する。一般にはそのまま一緒に煎じて用いる。服後吐を生じた者は後の分はのませなくてもよいとある。香豉は黒大豆を特殊の醗酵方法によって製するが、中国原産のもののないときは普通の納豆を乾燥したもの、あるいは大豆を蒸してから乾燥したものを代用してもよい。

*2 以上二味、水400竕を以先ず梔子をにて250竕とし、之に香豉を入れ再び煮て150竕となし濾過して75竕を温服せよ。服後吐したときは後服を止めよ。

*3 以上二味、水400竕を以先ず梔子をにて250竕とし、之に香豉を入れ再び煮て150竕となし濾過して75竕を温服せよ。服後吐したときは後服を止めよ。

*4 右二味、水約一合五勺を以て、梔子を煮て一合程となし、滓去り、香豉を入れ、再び煮て六勺程となし、滓を去って一回に温服する。(通常一日二、三回)

*5 右二味、水一合六勺を以て、先ず梔子を煮て一合を取り、梔子を去り、後、香豉を入れ、再び煮て六勺と為し、滓をさりて一回に温服する。

*6 水160を以て梔子を煮て100に煮つめ香豉を加えて煮直して60に煮つめ二回に分服

*7 水半量常煎法三回に分服

*8 右二味、以水四升、先煮梔子、二升半、内豉、煮取一升半、去滓、分為二服、温進一服、吐者得吐者止後服。

*9 右二味の中水八勺を以て先ず梔子を煮て五勺となし、香豉を内れ煮て三勺となし、滓を去り分かちて二服となし、温めて一服を進む。若し服して後吐を生じたる者は後の分を服さしめず。

注1
本方は心中の懊憹と身熱とを目標に用いる。心中懊憹とは、心胸中にうつ悶の状があって、まんとも名状のできない状態をいい。しばしば不眠を訴える。身熱とは、悪寒をともなわないで、身体に熱感をおぼえるものをいい、体温は必ずしも上昇していなくてもよい。またその身熱、身体の一部に限局している事もある。腹診するに、心下部には、堅硬膨満などの状なく、さりとて軟弱無力というほどでもない。本方は梔子と香豉の2味からなり、梔子には消炎、止血、鎮静、の効があり、香豉にもまた鎮静の効がある。本方は肝炎、黄疸、皮膚炎、不眠、口内炎、痔核、食道炎などに用いる。

注2
心中の懊憹と身熱とが目標である。すなわち、心胸中に憂悶の感があって、いかんとも名状しがたい状態である。しばしば不眠を訴える。身熱というのは悪寒をともなわず、身体に熱感を覚えることで、体温の上昇はなくてもよい。また身体の一部に限局されてもよいもので、たとえば手足,顔面もしくは肛門の周囲にだけ訴えることもある。心下部は堅硬膨満というほどのことはなく、またそれほど軟弱でもない。山梔子は胸中の熱煩を治し、香豉は胸になじむ気を順らし、かつ胃の虚熱を去る働きや解毒作用があると考えられる。梔子には消炎鎮静の効あり、香豉にも鎮静の効がある。主治条項に掲げてある諸症状を、龍野一雄氏は次のように整理した。

(1)胸部症状　心中懊憹・心中結痛・心憒憒・胸中窒・喘。
(2)神経症状　不得眠・※語・煩・煩躁。
(3)腹部症状　腹満・胃中空虚・客機動膈・不結胸・心下濡・飢不能食・口苦・舌上苔。
(4)体　症状　身熱・悪熱・煩熱・躁・煩躁・怵惕(恐れること)・反覆顛倒・身重・頭汗・手足温。
(5)熱　症状　虚煩・煩熱・煩躁・下熱・咽燥。

これらの複雑な諸症状を、梔子と香豉の二味によって好転させるというものである。症状は余邪が心胸間に鬱滞して、虚煩するもので、この二味がよく胸中の鬱邪を解するものというべきである。

注3
心胸部がもたれ、異和感がありる、身体に熱感があってだるい、不眠,咽喉乾燥、口苦。
応用　カタル性黄疸症、食道狭窄症、不眠症、ノイローゼ、胃炎、胃潰瘍、口内炎、出血。

注4
急に胸がつまり、激しく痛むものに用いる。梔子豉湯は梔子・香豉の二味からなる。急にきた激しい症状には、簡単な処方はよく効を奏する。梔子は掴むような痛みに用いる鎮痛剤であり、香豉は胸苦しい時に用いる消炎性の健胃剤で、黒大豆を醗酵して作るか、納豆のほしたもので代用してもよい。

注5
急に胸がつまり、激しく痛むものに用いる。梔子豉湯は梔子・香豉の二味からなる.。急にきた激しい症状には、簡単な処方はよく効を奏する。梔子は掴むような痛みに用いる鎮痛剤であり、香豉は胸苦しい時に用いる消炎性の健胃剤で、黒大豆を醗酵して作るか、納豆のほしたもので代用してもよい。

注6
発汗性、嘔吐性及び排便性治癒転機を起こさせた後、それぞれの証候複合は一応は解消したが、神経症状を起こして虚煩し、睡眠することが出来ないとき、激しい場合には必ず展転反側し、心中懊憹するときは、梔子豉湯の本格指示である。

注7
下利した後、煩が一層劇しくなるとき、心窩部を圧診して軟かである場合、虚煩である、梔子豉湯の本格指示である。

注8
これは発汗及び吐下の後、表邪は已に解し、精気は俄かに脱し、餘熱が胸間に鬱シテ虚煩し、若し劇しければ、或は反覆顛倒し、或は胸中塞がり、或は結痛する等の證に對する薬方であって、主として胸中の邪鬱を解し、気液を順導して、諸般の苦痛を去る等の能を有する。(太陽病篇)これは下すに因て邪熱は去り、胃中も巳に空虚にして、唯だ餘熱が胸中に鬱して心中懊憹し、舌上に胎を現はす等の證に對する薬方であって、主として胸中の餘熱を除き、心中の懊憹を去る等の能を有する。(陽明病篇)こらは下利に因て、邪毒は除いたが、精気が俄に虚し、餘熱は逆して胸中に鬱し、虚煩を発する等の證に對する薬方であって、主として餘熱を去り、精気の虚を復し、虚煩を治する等の能を有する。(厥陰病篇)

注9
梔子豉湯の証として、傷寒論に挙ぐる所の要を摘めば
(一)発汗吐下の後、虚煩して眠ることを得ず、若し劇しければ反覆顛倒(輾転反側の意)し、心中懊憹する証(太陽病中編)
(二)発汗し、若くは下して、煩熱し、胸中塞がる証(同上)
(三)大に下して後、身熱去らず、心中結痛する証(同上)
(四)之を下して、胃中空虚に、客気膈に動き、心中懊憹し、舌上胎ある証(陽明病篇)
(五)之を下し、結胸せず、心中懊憹し、餓えて食すること能はず、但だ頭に汗出づる証(同上)
(六)下利の後、更に煩し、之を按じて心下濡なる証(厥陰病篇)
又、金匱要略に於けるものは下利の後、更に煩し、之を按じて心下濡なる証(嘔吐噦下利篇。此の証傷寒論に同じ)なり

注10

虚煩して眠られず、或は心中懊憹、或は胸中ふさがり、或は心中結痛、或は煩熱、或は頭汗でるもの、或は出血

応用　熱病、肺炎、胸痛、不眠症,吐血、喀血、痔出血、掻痒性皮膚病、胃痛、胃酸過多症、口内炎

注11
心中懊憹と身熱を治す。 応用　不眠症、食逆狭窄、諸出血、心痛、皮膚病、カタル性黄疸
梔子鼓湯は割合に使う人はないが、之も亦大切な処方で、胸内苦悶を主症とするときには不可欠のものである。本方の狙いは煩熱。胸がふさがるように苦しく或は痛む。心下部は軟く、たとえ緊張しているように見えることがあっても押すと底力がない。その他空腹を覚えても食事がとれないとか、熱がるとか、眠れないとか、舌の白苔があってその中にぽつぽつ乳頭だけが赤くみえるとかの所見があることがあるから参考にする。

注12
山梔子香鼓ともに気味苦寒で熱を瀉すが山梔子は軽くして胸に行き、香鼓は食品に近きもので胃に行き各の場所の虚熱を去る。香鼓中には肝臓の解毒作用を促進する物質を含んでいるらしい。使う機会は少ないが稀ではない。

注13
一、肺炎・肺結核・心臓病・急性性伝染病の汗下後解熱剤に対する特異体質等で発熱煩熱心煩胸中塞がり或は痛むもの
二、熱病・高血圧症・神経衰弱・ノイローゼ・血の道症・自律神経不安定症等で不眠を訴え或はのぼせ神経不安身熱等が特に夜間に増悪するもの
三、歯齦出血・舌出血・鼻血・吐血・喀血・痔出血などで局所に熱感を持ち出血に対して非常に気にやむもの
四、性的神経衰弱で懊憹し或は息切れし発熱するもの
五、口内炎・舌炎・歯齦炎・咽喉炎・扁桃腺炎・唾石等であるいは充血出血熱痛し、或は粘痰がからみ苦しいもの
六、食道狭窄・メッケル氏憩室炎・食道癌等で食道がふさがり或は熱感を覚えるもの
七、胃炎・胃酸過多症・胃酸欠乏症・胃潰瘍等で胃痛胸やけするが胃部の腹筋は緊張しないもの
八、凍傷・じん麻疹・湿疹・皮膚炎・帯状匍行疹・紅痛症・紅斑等で発赤熱感充血強く、かゆみ又は痛みが強くて安眠ができぬほどのもの
九、黄疸で発熱小便赤く心下に緊張なきもの
十、夏になると手足がほてってだるく眠れぬもの

注14
梔子鼓湯の証
熱のある病気にて汗をとったり、吐かせたり、又下剤をあたえて下したりした後、胸の中が空っぽの様なたよりない気持ちがして眠られず。其のひどい時には展轉として落ち着かれない者、以上の様な状態でのどがふさがる者、或は胸の中や胃の中が痛むもの、或は手足が温かく胸中が苦しいので腹はへっても食べる事の出来ない者。

処方番号：88　　**処方名**：梔子柏皮湯（ししはくひとう）

処方構成：
山梔子 1.5-3、甘草 1-2、黄柏 2-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で熱感があり、ときに痒みがあるものの次の諸症

効能・効果：
皮膚炎、皮膚掻痒症、目の充血

原典：傷寒論
出典：

解説：
肝胆湿熱で、発熱・頭汗・黄疸・口渇があり、腹部膨満・便秘がみられないもの。舌質は紅・舌苔は黄・脈は数。
本方は肝胆湿熱で「熱証のつよいもの」に適応する。すなわち、炎症が主体になるものである。清熱解毒の山梔子・黄柏・生甘草で消炎・解熱・抗菌・解毒し、山梔子・黄柏の利胆作用と黄柏の利尿作用を利用する。茵蔯蒿湯に準じ、炎症のつよい皮膚炎などに用いる。

88.梔子柏皮湯

参考文献名		肥梔子	山梔子	甘草	黄柏	用法・用量
漢方診療医典	注1	3		1	2	
漢方処方応用の実際		3		1	2	
漢方医学		3		1	2	
新版漢方医学		3		1	2	
症候による漢方治療の実際	注2					
経験漢方処方分量集			3	1	2	
改訂新版漢方処方集	注3		1.5	1	2	
改訂新版漢方処方集　便法			2	1.5	3	
増補改訂漢方入門講座上巻	注4		2	1.5	3	*1
新撰類聚方	注5	15個		1両	2両	*2
現代漢方入門	注6	3		2	2	
1000万人の漢方診療と治療の実際		3		2	2	
漢方古方要方解説	注7	4.8		2	4	
新古方薬嚢	注8	1.5		1	2	

*1　内服他に外用（洗眼）
*2　2回分服又は外用（洗眼）

注1
・黄疸があっても、腹満や胸脇苦満の腹証がなく悪心、嘔吐、口渇、尿利減少などのないものに用いる。

注2
・この方は黄連解毒湯の黄連、黄芩の代わりに甘草の入ったもので、皮膚の灼熱感や掻痒感のあるものに用いてよいことがある。
・体温の上昇はなくとも、熱感のあるものに用いてよい。この熱感は局処的のものでも、全身的のものでもよい。

注3
・目標　身黄発熱
　応用　黄疸、掻痒性皮膚病、充血性眼病

注4
・運用一　黄疸　身熱発黄、或いは瘀熱発黄に使う。
　運用二　痒み　黄疸でも皮膚が痒くなるが、皮膚炎、じん麻疹、その他の皮膚病でも発赤乾燥感のある痒みに使う。
　運用三　眼の充血　眼球黄赤熱痛甚しきを洗ふに効あり。

注5
・黄疸は発熱心煩し腹軟大小便に変化なきもの
・じん麻疹・皮膚炎その他の皮膚病で発赤乾燥感かゆみの強いもの、或は黄疸でかゆいもの
・角膜炎・結膜炎・虹彩炎・眼瞼炎・眼瞼周囲湿疹又は皮膚炎等で充血発赤かゆみ又は痛みが強いものに本方を服用又は本方で洗眼する。

注6
・黄疸、皮膚病

注7
・本方証　身黄み、発熱する証(陽明病篇)なり。
・応用　(一)発熱の後、微熱尚ほ去らず、胸中欝塞の感ありて煩悶し、頭のみ汗出で、尿黄色を呈する証。
　(二)黄疸等にして、発熱し、煩悶する証。
　(三)蒸々として発熱し、衄血を発する証。

注8
・黄疸病にて発熱する者、身体むしむしと熱くして煩する者。